



鴻文会会報

第 15 号

発行・鴻文会

753 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話 (0839)22-6111
(内線) 808

(連絡事務所)
山口市平井773-2
沖田ビル202
電話 0839-28-4527
(FAXも)

郵便振替口座
01500-4-15902

鴻文会の「連絡事務所」開設について

会長 大塚 博久
(中国哲学・文理第四回卒)

本年、六月十日(土)に平成七年度の役員会を開催致しました。事業計画・報告ならびに会計予算・決算の詳細については、別掲諸表等を御覧頂きたいと存じますが、今年とくに御報告申しあげたい点は、まず「事務執行体制の強化」について協議したことであります。

本会の日常運営は、従来より学内幹事の方々のボランティアによって担われてきていることは、皆さま御存じの通りであります。昨年三月和田敏英前会長、今年三月には八木充幹事(前学部長)が定年退職されましたことに加えて、岡光、田中、添田、佐々木各幹事もそれぞれ学部運営の中核、あるいは研究教育の要めとして重責を担われ、日々多忙に活躍中で、公務の細部にわたってのこれ以上の御負担はかけにくい現状となって参りました。先年来、事務近代化については懸案事項として検討してきた経過もあり、この際、より具体的な方策を打ち出すべく、御協議をお願いしましたところ、特別会計として蓄積中の基金から平成七、八両年度にわたり、各一〇〇万円程度の支出を認めて頂き、日常業務のOA機器化と、事務アルバイトの雇用を考えることになりました。

一方、本会の事務室の学部内確保については、学部当局と長年協議、お願いをしてきたところですが、何分にも人文学部には施設の余裕がないばかりでなく、近年の大講座制移行、さらには教養部廃止に伴う人員増等、会議室、教官控室も研究室などに転用をはからざるを得ない現状で、歴代学部長の御努力にもかかわらず打開できないで参りました。そこで兄弟同窓会である理学部同窓会と共同で、より可能性があるかと予想される理学部施設内に事務所を置く方向で、理学部同窓会側とも連絡協議をして参りました。



事務所入口のプレート

がありました。理学部同窓会はその後、原田会長が大学近傍に適地を物色され、個人で大いなる展望を得ましたことを喜びました。そして原田会長の御尽力により、山口大学正門近くのオフィスビルの二階に八月より入居、事務アルバイトも共同で雇用することを決定、九月より開設に至りました。

事務所、事務アルバイト雇用懸案事項は、ここに一応の解決を見ただけでなく、ルーツを同じくする理学部同窓会と再び緊密な関係となり、鴻南会との連携にも一層好都合となりました。

八月三十日、山本和之人文学部長、加屋野洋理学部長(同窓生)を交え、両同窓会の会長、学内幹事十一名が集り事務所開きを兼ねて今後の運営についての会議を開催するとともに、事務を担当していただく人文第十回ドイツ語学文学科卒業生の清水(旧姓林)美登利氏を紹介致しました。

事務所は、下記の通り、市営バス停「山口大学前」にもっとも近く、平日、13時より17時まで執務しております。内部は十五人程度の会議ができるよう設備しており、ソファ・湯茶準備もできますので、気軽にお立ち寄り

たまたま昨年九月、先輩同窓会下さるよう御案内致します。事務所ビにあたる旧制山高「鴻南会」の七ル横には三台程度の駐車が可能です。十五周年記念大会が開催されるにまた夜間、御利用の際は、会長、学内幹際し、両者の連絡緊密化のため、事まで御連絡頂ければ、鍵をお渡しし理学部同窓会と鴻文会が会合するますので、同窓生間の会合に積極的に機会があり、理学部当局に共同でご利用下さい。文書の受け付けもここに事務所設置を陳情するという経過で行います。ここに本会が会務執行面

をもちまして、皆様の御理解とご支援をお願い申し上げます。

記

一、事務所所在地

山口市大字平井七三二一

沖田ビル二階二〇二号室

二、事務所名称

山口大学「鴻文会」連絡事務所

(山口大学理学部同窓会連絡事務所共用)

三、TEL・FAX

(〇八三九)二八一四五二七

四、通常執務時間

平日 13時〜17時

(但し年末年始を除く)

(緊急の場合は従来通り人文学部へ)

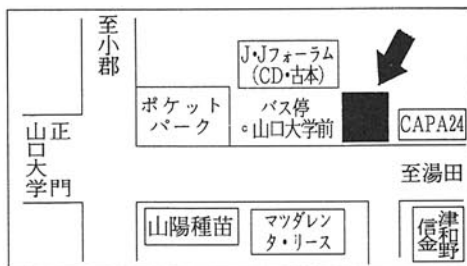
(なお、本年12月〜4月の間は清水氏は休職。代りに小野早苗氏(元本学人文学部職員が勤務します。)



鴻文会連絡事務所入口付近



開所式の風景



私の中の山大・山口

無題

吉井淳一
(国文学・文理第五回卒)

朝、六時半起床。顔を洗うと三田尻駅(現防府駅)に駆け足。六時五十分発の汽車に乗る。いつもの同じ顔ぶれがそのまゝ小郡駅で乗りかえて山口に向う。山口駅からまっすぐの道を歩くと教育学部(現山口市役所)につき当る。しかし、我々は途中で左に折れて糸米に向う。



大学会館全景

昭和二十七年四月、初めて大学生になり旧制山口高等学校が衣がえした文理学科
部のキャンパスに足を踏み入れた。慣れるにしたがって多くの友人が出来た。聞いてみると、山口県内だけでなく中国各県や九州出身の学生も沢山いた。今まで防府市内の人しか知らなかった私には、目の前が大きくひらけたような気がする。今でこそ各学部が統合され平川にその存在を大きくアピールしているが、当時の山口大学は各学部があちこちに点在をしていた。それもそのはず、戦後の学制改革により国内各地にあった旧制学校、師範学校高等商業などが、各県ごとにまとまり新しい大学が設立された。それゆえ既存の大学と対比して「新制大学」と言われ、又、各県に少なくとも一校の大学が設立されたことから「駅弁大学」と陰口をたたかれたりした。

しかし、我々には関係なし、新しく出来た友人はいつしか悪友に変わる。そして又、私も悪友に変わって行った。大学に通う楽しさは、真面目くさって先生の講義を拝聴するのではなく、悪友と会うことであつた。だから、いつしか、三田尻駅は定刻に出ても山口駅から先はどこに行かずか判らない毎日が続いた。その努力の甲斐あって目出度く落第をする。関守先生が大変心配して下さり何とか卒業したが、同時に国文学は大学にお返しして、専ら実践的政治学の勉強をすることになる。三十年ぶりに、東京から防府に帰って来た。まさに浦島太郎の心境。その心境のまゝ市長選挙に立候補。気がついたら市長室に坐っていた。選挙中、当時の悪友が一生懸命応援をしてくれた。まさに賢友に変身。今も当時の多くの先輩、友人が私のまわりに居てくれる、有難い事

だし、心強い限りだ。
戦後五十年、大学の在存も大きく変わらうとしている。先日、防府市で「生涯学習と大学のあり方について」村上山口大
学長、高山口女子大学学長などと、大いに議論をたかかわせた。閉ざされた、象牙の塔から、しなやかに開かれた大学へと華麗な変身を遂げてほしい。
(防府市長)

山口と私

倉住靖彦
(国史学・文理第十五回卒)

卒業式の後、後輩の諸君とともに、湯本温泉に行った。車窓から去りゆく山口の風景を眺めながら、これで山口との縁は切れたかなと思つた。ところが、さにあらず、院生時代に周防鑄銭司跡の発掘調査に関係して以来、四半世紀以上を経た現在も続いている。とくに近年は山口県史編纂専門委員を委嘱され、年間に数回は山口に行っているし、これは今後も数年は続くであろう。また私的にも妻の実家が防府にあるので、山口県に行く機会も多く、こうして山口と私の関係は永遠なものとなつた。

このたび寄稿を求められ、あらためて記憶を整理した。当時の思い出と現在の心境とを緋い混ぜながら、この一文を草する次第である。
鳳陽寮で二年間を過ごした後、下宿を求めた。そこは文理学部の裏門に近く、一の坂川の両岸に桜と柳が並木をなし、古の家並とともに、対岸からは琴の音も聞こえるなど、落ち着いた雰囲気をも感じさせていた。河鹿ガエルの澄んだ声や乱舞する蛍などの風情を楽しみ、友と語りながらビールを飲んだ記憶は今も懐かしい。このようにいえば、優雅な生活をしてきたかのような気がするが、そうではない、たまさかのことが記憶に残っているだけで、日常はごく平凡であつた。
三、四年生の時には通算して半年以上も帰省していたことなど、思い出は多々あるが、その第一は『国民百科事典』を購入したことである。現在は『大百科事典』を使用しているが、依然として書架に並んでいる。それには父が求めてくれたゴム製の蔵書印を押し、昭和三八年一月の日時を記している。その後は日本史を専攻し、現在も関連の職務に従事している。この間に多くの書籍を求めたが、購入した時のことを鮮明に記憶しているのはこれだけである。
それは前年に刊行され、手頃な百科事典として喧伝されていたので、私も欲しかったが、その価格は一カ月分の生活費に相当し、親に無理をいえる状況でもなかった。しかしどうしても欲しく、思い切って書店の営業主任らしい人にその旨を話したところ、意外にも山大学の学生ということで月賦にしてくれた。とくにこれという保証もなく、よく信用してくれたものである。七冊からなる大冊の事典が配達され、それを手にした時の感激は今も脳裏にあるし、それからは多くの知識を得た。その人の名は忘れられたが、この恩は今も忘れていない。
(九州歴史資料館)

〈読むこと〉の学び

森下辰衛

(国語学国文学・人文第四回卒)

私は一九八一年四月から一九九二年三月までの十一年間、そしてその内の十年間を学生として山口に生活しました。恵まれた自然環境、勉強できる落ち着いた町の雰囲気、下宿の水道は井戸水で、大きな都市に住んでいる今では考えられないことです。長く学ばせて頂いた分、大学では色々な勉強をさせて頂きましたが、主な分野は日本の近代文学とフランス文学でした。国や言葉や分野は様々ありまして、その中で最終的に学んだことはたった一つ、〈読むこと〉であったと思います。

本を読むことはまず言葉と出会うことです。言葉が私を打ち、言葉が私を問い、言葉が私を照らす。そして私は言葉と戯れ、あるいは言葉と深く語り合うのです。しかし〈読むこと〉はまず耳を傾けることです。そしてその大きな声だけでなく、最初は聞こえなかった小さな声が次第に聞こえてくる時、その密やかでしかし強い喜びと共に、私の生命と世界のそれとが共に新しくなっていくのを体験するのです。

すぐれた言葉の声は〈真実〉を語ります。作家は物凄い苦勞をして作品を書きますが、それは取材の労や構成の苦心、文章の彫琢のみにあるのではなく、もつと本質的なところすなわちこの〈真実〉と関わる所で作家は血を流して書くので

す。血を流しても書かざるを得ないような〈真実〉に、あるいは〈真実〉を照らし出す光に献身するのです。

例えば藤村が『新生』を書く時、その恥辱感や様々な恐れをも超えて作家を曳いて行ったのはこの〈真実〉であり、それが彼の中に顕現し、書くことの使命を彼に与えたのでしょう。それは自分の中の触れば血を噴くようなところにメスをを入れることであり、文字通り〈命〉を使うことと、〈読むこと〉はそんな〈真実〉を語る魂の声を聴こうとするのです。またそれは否定なしに受け入れることとであり、〈愛する〉ことです。そのま

まに受け入れる時に、言葉はその愛の内豊かに生き返ってくるのです。山口の時代に学んだ最も良きことはこの〈読むこと〉の態度であったと思えます。それは相手が何であつても真剣な関わりを試みる時に有効な唯一の方法でもあります。山口時代の終わりに私が聖書という神が血を流して書かれた本と出会いましたのも、この〈読む〉姿勢を僅かでも習得させて頂いたことによること、今深く感謝しています。

(福岡女学院短期大学講師)

自分史の原点

福島栄寿

(日本思想史・人文第八回卒)

予備校生活と青春の煩悶に鬱屈していた私は、瘦せた時代を過ごしていた。「遠くへ行きたい」。何かの縁で訪れた

山口は、そんな一心だった私の、文字どおり蘇生の場所としてあつた。心が錆びついた私には、暮らしたの何気ない出来事すべてが貴重な体験だった。コーヒを飲みながら、研究室で真夜中まで語りあったこと。樺野川の河川敷で、方便山の夕日を背にソフトボールに熱中したこと。友人と下宿で鍋を囲んだこと。そして、初めて恋をしたこと……。多くの友人の世話になりながら、出遇いの不思議を懸命に生きようとしていた。

そんな私が少し本気に山田先生の講義を聴き始めたのは、三回生の秋頃だった。返されたレポートの余白に記された先生の、さりげないが、しかし意味深い一言が気になりだしたのもこの頃のことだった。

主体的自己の確立を自らに課しながら、そんな自己表現の手段としての思想史学を、模索しようとしていた私。わけのわからぬまま丸山真男の論吉論に感化を受けた私は、確かに力が湧いてくるのを覚え、そして進学した。山田先生の夢を時々見るようになったのはその頃からだった。修論を纏め始めたころ、東西ドイツ統一を果たした。大きく世界が変わろうとしていた。だが、何をすれば、如何に考えればいいのか皆目検討がつかなかった。

豊澤先生宅で年始を迎えながら、何とか修論を纏め上げた私は、京都に帰り、研究活動を続ける次第となった。

帰京後、途方に暮れていた私は、大阪におられる研究室の先輩方には是非出て来いとある研究会に誘われた。そんな研究会に私は励まされ、勇気づけられた。まだ、歩める。いつの日にか、そう思えるよう

になった。それにしても、研究を通じての先輩方との親交は何とも嬉しいものだ。時に、酒を酌み交わしながら同窓の思いを語り合う。まさに至福の時である。

拙い書きものをお送りすれば、必ず叱咤激励して下さる恩師のお便りの文面から、語りかけて下さる師が眼間に浮かぶ。この上ない大切な出遇いをしてきたのだと今さらながら思わずにはおられない。

自分史の原点は、確かに山大にある。帰京して四年半。私は幾度か山口を訪れている。思えばその訪問はまるで、歩み始めた自分とその原点との距離を確かめる営みに思える。果たして、どこまで歩めるか。手探りではあるけれど、時には立ち止まりながら、しかし、歩み続けたいと思っている。

(光華女子大学真宗文化研究所助手)



会費未納の方はなにとぞお納め下さいませようお願い致します。

終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座

〇一五〇〇一四一二五九〇二
加入者名 鴻文会

各研究室同窓会紹介

西洋哲学

田中 晃先生を囲む西哲会

米寿を迎えられた田中晃元学長を囲む西洋哲学科同人の集いが、一月二十八日、湯田温泉の旅館で開かれた。幹事をつとめた八回生の渡辺澄利、立川和正両君を中心に、二回生から十五回生まで計十四人、「田中哲学」の薫陶を受けた中高年組が顔をそろえた。

田中晃先生を囲む会



田中晃先生（前列中央）を囲む、西哲同人たち（山崎君はこのあとかけつける）

一回生二人、二回生一人、三回生二人、四回生三人……という具合に、西哲の卒業生は他の学科に比べきわめて少ない。教師が多数をしめ、残りの職業は公務員、マスコミなどまちまち。「哲学ではめしは食えない」を裏付けるように、恩師の後継ぎとなる生徒はいない。

集いは、まず田中先生の特別講義「道元の思想」にはじまり、いずれも青春の学徒にかえって神妙に拝聴。その後、各自の近況報告などで交歓。酒杯も回って、宴も大いに盛り上がった。

八十八歳とはとても思えない、かくしゃくたる田中先生、大学運営や現状について、師弟間の話し合いははずんだ。今後、も年一回、囲む会開催を申し合わせて、散会した。幹事、筆者を除く、参加者は次の通り。数字は回期。

- ②佐竹利雄、④大塚博久（特別参加）、藤井日正、⑤石村正己、瀬川芳昭、⑥国司貞夫、中野文男、⑧田辺彬、山崎種三、⑩藤井舒夫、⑫赤梨和則▽ほかに会費参加五人。

（西洋哲学・文理第二回卒 溝部忠増）

社会学系

平成七年度第十八回同窓会総会は、六月三日午後四時より、山口市湯田温泉にある翠山荘で行われました。小谷典子先生、横田尚俊先生、高橋征仁先生と、一年のアメリカ留学を終えて帰国された小川全夫先生、現教官四名を含めて二十九名の出席がありました。昭和二十八年に卒業された方から平成六年に卒業された

方までの幅広い世代で構成され、研究室の歴史を感じさせました。

今回の主要な催しとして、小川全夫先生の御講演がありました。アメリカでの御体験から、さまざまな側面での日米比較を、力強く展開して下さいました。

また、前回の同窓会にひき続き、「山口大学社会学同窓会」にかわる新名称を何にするかということが議題となりました。「山口大学」「社会学」といった文字は残してほしいと希望される方、姫山や榎野川、鴻ノ峯といった地名を生かすことを希望される方、全く新しい個人的な名称を希望される方……残念ながら、今回も決定には至りませんでした。多くの参考となる意見を拝聴することができました。

出席者がお一人ずつ、思い思いの自己紹介をされた後、親睦会となりました。終始、笑い声の絶えない和やかな雰囲気と、皆が世代を超えた交流を楽しまれていた姿が、深く印象に残りました。最後になりましたが、総会を設定して下さいました山口支部の方々に厚くお礼申し上げます。

国文科

一九九五年年度の国文科同窓会は、八月二十六日（土）の午後三時より、山口市湯田の「山泉荘」で開催されました。出席者は十三名と例年通りの？、少教精鋭でしたが、関一雄、平野芳信両先生をお迎えし、しばしの間歓談して時のすぎるのも忘れるばかりでした。お一人お一人

の学生時代のとっておきの話は、戦後五十年という区切りの年も意識されたのか、途切れることなくつづきました。

昨夏、「余裕のある会費収入を使って母校に植樹を」という元気なご意見をいただきました。総会の場で実現に向けて議論すべきでしたが、終わってみれば審議忘れ（未了ではなく？）でこの問題は来年夏に持ち越し。やはり我が国文科同窓会はアバウトです。忘れないようにもう一度書き残しておきます。総会が出された意見としては、懇親会は、大学会館そのほかでの立食形式のパーティにし、会費も安くして若い方の出席しやすいものにしよう、などがありました。

研究室便り

国語学国文学

一九九〇年一二月発行の本会報（第一〇号）に国語学・国文学研究室の近況報告が掲載されてから、五年が経過しました。この間に教官の異動が、三件ありました。水本精一郎教授が一九九二年三月に、山口大学の定年までに一年を残して、大分県立芸術短期大学に転任されました。先生が若い学生諸君をこよなく愛され、毎週の課外ゼミの近代文学輪読会では深夜まで議論を戦わしておられたのを思い起こしますが、御転任後もしばしばゼミに御出席下さっておられるのには、ただただ敬服するばかりです。続いて柴田勝



国語学国文学研究室風景

二助教授が一九九三年三月に、御郷里に近い相愛大学に転任されました。先生が比較的短かった山口大学の在任中に『閉じられない寓話』(一九九〇年)・『大江健三郎論』(一九九二年)の二冊の著書を立て続けに上梓されたのには、敬服するのは当然として、牛の歩みを続ける筆者ごときには衝撃的な驚きと言った方が正直な感想でありました。柴田先生の後任として、平野芳信助教授が一九九三年一〇月に着任されました。平野先生は谷崎潤一郎・芥川龍之介等の研究を中心に近代文学を広い視野から分析し、特に話型研究の観点からは平安文学の物語にもアプローチしておられます。

石井大教授・添田建治郎教授そして筆者は前回の報告と特に変わるところはありません。添田先生は、積年の研究を近々大著にまとめ上梓すべく、寸暇を惜しんで研鑽の毎日であります。その御報告は次回のその楽しみにしておきたいと思えます。ただし、人文学部国語国文学の会員の皆様には学会誌「山口国文学」を通して一足先に、添田アクトセント史学の紹介・書評がお伝えできると存じます。ちなみに、まだ会員でない方、途中で退会なされた方々に本年度の学会の代表委員を努めます筆者から、本会への御加入・再加入のお願いをこの場を借りて申し上げます。

在学生諸君についての御報告としては、一九九四年四月の進級生から国語学国文学を改め、日本語文化論コースの新名称のもとに所属することとなり、その二年生・三年生が六一名、それ以前の学生達と合わせて九七七名が、現在、国語学国文学研究室に集結して、日夜勉学に励んでおります。特に、大学院生六名、中国・韓国の研究生二名の諸君の熱心さは、後輩の学部生のおきお手本であり、この上ない刺激剤となっております。更にその勉学の延長としての鷺流狂言の大学祭上演も一月三日に盛會裡に終わりました。本年は「因幡堂」「蚊相撲」の二曲を演じましたが、練習は八月末頃から、毎週月曜日夕方六時から九時過ぎまで、山口鷺流狂言保存会の小林栄治・米本文明両先生の熱心な御指導のもと、得難い経験を積んで、一九六五年以来の伝統の灯は本年も山口大学姫山祭を輝かせました。

今年も、「狂言が熱い」のキャッチフレーズは、筆者もおおいに気にいっており、学生諸君の若さ・熱さに負けまいと筆者も老国語教師も静かに燃えております。来年度から新カリキュラムによる教育改革が本格的に始まります。これまでの教養教育は共通教育の名目のもと全学の教官が担当します。筆者もその新カリキュラムによる講義を担当できる身の幸せを感じます。専門教育もこれまでの教養部の先生方と御一緒に担当し、より充実したものと成るでしょう。大学は冬の時代に入ったとも言われますが、わが国語学国文学研究室、日本語文化論コースは、さるがゆえに熱く燃えて、数年後に迫った二一世紀を目指して邁進していると御報告致します。(教授 関 一雄)

はじめまして

新任教官の紹介

協 條 靖 弘

(人間学・講師)

この四月から講師として山大人文学部に来ました協條と申します。専門は古代ギリシャの哲学で、これまで主にソクラテス、プラトンの道徳哲学を中心に勉強して来ました。

私は大阪で生まれたのですが、一歳のとき両親の故郷の和歌山県にもどり、高校卒業までは父の出身地の高野山のふもと、紀ノ川中流の田舎ですごしました。

「協條」という名前ですが、「協」も「條」も普通の字なのにこの組み合わせはめずらしく、私は今まで数名の親戚(叔父一家)以外にこの名字の人を知りません。父の話によると、「協條」のルーツは大



教養部売店付近より教育学部をのぞむ

阪の河内の千早赤坂村あたりにあるようです。河内の言葉は「きたない」とか「こわい」とか言われていますが、私の育ったあたりは和歌山県でありながら大阪府に近く、言葉も河内弁に近いようです。(サ行がなくすべてタ行で発音するのは和歌山市あたりと同じですが。)近所に河内時代からの遠い親戚らしい老婆などいて、その人は「わきじょう」ではなく「わきんじょう」と発音していました。私の妹などはその人に「ワキンジョの子、ワキンジョの子」と変な呼ばれ方をするのが嫌だったようです。

とにかく田舎度の高い地方で、高校の同級生の中には高野の山岳地帯から通っている子もいて、家の屋根裏にサルが棲んでいたとかムササビがいたとかいう話もありました。(私の家は紀ノ川に沿った細い平野にあったので決してそのようなことはありませんでした。念のため。)

私が以前アルバイトをしていた大阪の塾の塾長先生などは、「和歌山では塾は商売にならん。あそこでは勉強できるやつなんぞはまったく評価されん。和歌山の高校生はみんなミノシマ高校の野球部員にあこがれとんのや。」という暴言を吐いていましたが、たしかに高校受験のためには必死で勉強するというような風潮はありませんでした。それはそれでよかったのだろーと思いますが、私の場合はとにかく根本的に田舎者の資質からは抜け切れないようです。京都大学に入って哲学の勉強を始めたとき、およそ「哲学青年」というイメージではないということでもわりから「森の哲人」とか「きこり」とか言われて心外だったのですが、どうにも垢抜けないところがある事実は認めざるを得ません。

こちらに来て、山口はとてもきれいな町だなあという印象を受けました。山口の道路がよく整備されていることは聞いていましたが、それ以外の場所もよく手入れされているという感じがします。(私の妻は公園のトイレがきれいなのに驚いていました。)人口が少ないので大都市のような狭苦しい感じがなく広々としている一方、やはり県庁所在地として山口県の中心都市であるという重鎮性を持っているからでしょう。大学の環境も快適ですし、人文学部の各先生も皆さくなく方であるようなので安心しております。まだ慣れないところもあり、いろいろ御迷惑をおかけするかと思いますが、人文学部の一員としてできるかぎり努力したいと思しますのでどうぞよろしくお願いたします。

山口大学に赴任して

和田 学
(言語情報学・助手)

今年の十月に言語情報学の助手として赴任しました。つい数か月前までは、九州大学の大学院生だったので、身辺の変化にまだ戸惑っています。予算で自分が使うものが買えるということや、自分の研究室があるということに、まだ頭が馴染んでいません。

私が現在関心をもっているのは日本語の統語論、より具体的には、名詞句の構造と格標識です。これらを生成文法と呼ばれる理論を背景にして研究しています。この他にも、朝鮮語・韓国語と日本語の比較統語論も並行して行なっています。この二つの言語の文法は基本的には全く同じと言ってもよいほど似通っています。が、少し詳しく見ると興味深い違いがいくつもあります。それらの違いを単に記述するのではなくそれが何によってもたらされるのかを説明することができればと思っています。

朝鮮語・韓国語を研究の対象にしているので、授業でも初級の朝鮮・韓国語を担当させてもらっています。学生の皆さんはどうにかこうにかハングルの一つ一つの文字と発音が結び付けられるようになってきました。日本語にはない発音や複雑な音韻規則に悪戦苦闘している段階です。みんな真面目に授業に取り組んでいるのですが、授業中であてて、発音させようとする、授業前の声とは打つ

人文学部教官紹介

て変わったような蚊の鳴くような声しか出なくなるのはどういう訳でしょうか。山口の街は少々不便なことと、どこに行っても学生がいるので、下手に千鳥足で歩いたりできないというものを除くと落ち着いた街で、ゆっくり勉強ができそうです。この環境を自分の研究内容の向上に生かしたいと思っています。

学部長(併) 山本和之
 ○人文社会学科 人間学 教授 山本和之
 教授 藤本徹
 助教授 高木智一
 助教授 佐藤光哉
 助教授 加藤和光
 講師 林文靖
 講師 脇条弘美
 歴史文化 教授 畑地正憲
 教授 川中二憲
 教授 田中誠二
 教授 橋本義則
 助教授 滝野正太郎
 講師 小原豊志
 社会情報学 教授 奥津一聖
 教授 藤津一
 教授 近藤子
 教授 小谷全夫
 教授 小川博
 教授 中村友博
 教授 佐々木尚衛
 教授 横山紀久子
 外山真弓
 高山征仁
 講師 外国人教師 スヌークス、ポール、エドワード

○言語文化学科 国際コミュニケーション 助手 多賀まゆみ
 教授 関一雄
 教授 添田建治郎
 教授 入谷仙介
 教授 富平美波
 助教授 岩瀬浩三
 助教授 下寄正利
 助教授 高垣由美
 講師 石井大
 教授 田中晋
 教授 岡光一
 教授 阿部泰浩
 教授 井上三朗
 教授 平野芳信
 助教授 浅見洋二
 助教授 池園宏
 言語情報学 教授 山本和之
 教授 岡昭夫
 教授 平野尊識
 助教授 フリップス、ジョン、デイヴィッド
 乾秀行

平成6年度事業報告

- 1. 第17回役員会 (6月18日)
- 2. 「鴻文会会報第14号」発行 (12月24日)
- 3. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (6月26日)
- 4. その他

平成6年度決算

収入総額 2,242,143 円 支出総額 1,817,706 円 残額 (次年度繰越金) 424,437 円

収入の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
繰越金	1,146,709 円	1,146,709 円	0 円	
会費収入	1,200,000	1,050,000	△ 150,000	5,000円×210人 平成6年度入学者242人
名簿収入	180,000	4,500	△ 175,500	3人分
雑収入	10,000	40,934	30,934	預金利息(14,934円)、懇親会参加料(26,000円)
合計	2,536,709	2,242,143	△294,566	

支出の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
会議費	100,000 円	113,760 円	13,760 円	役員会、その他
印刷費	220,000	208,987	△ 11,013	会報印刷費 (3,900部)、振込用紙
郵送費	300,000	260,058	△ 39,942	会報郵送料
事務費	360,000	113,150	△246,850	会報発送宛名書きアルバイト、 幹事謝金、事務手伝い謝金、文具
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
積立金	1,000,000	1,000,000	0	特別会計定額貯金
予備費	456,709	21,751	△434,958	電報代、鴻南会祝儀
合計	2,536,709	1,817,706	△719,003	

特別会計

科目	当初予算額	6年度決算額	比較増減	摘要
積立金	4,103,540 円	4,103,540 円	0 円	中期国債ファンド、定期貯金
積立新規分	1,000,000	1,000,000	0	定期貯金
利子収入	15,000	51,861	36,861	
合計	5,118,540	5,155,401	36,861	

平成7年5月27日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監事 米屋廣志 印
芳西靖幸 印

随想

女性と大学

入谷仙介

私は新制大学の第四回生で、そのころ大学で男女共学が始まってまもなく、女子学生はキャンパス内にちらほらであった。戦後の熱気がまだ消えておらず、アメリカ直輸入の男女平等論が猛威を振るっていたころで、入学してきた女子学生たちは、男性社会の中に切り込んで、女性平等のバイオニアタラントという意気込みで燃えて、威風あたりを払うような人が多かった。といって内実は今考えようと、古い時代をまだ引きずっていたのであった。

私たちが在学していたころに、京大法学部で、女性としてはじめて桂静子さんという方が助教授に任用されて、そうとうに話題になった。しかし数年後に教授の媒酌で、検事さんだと結婚して、教壇を去られた。別にだれもそのことを怪しまなかったようである。私の同年輩の人でも、夫君より、夫人の方が研究者として優秀であったにもかかわらず、夫君の研究を支えるために、家庭にあって、家事と子育てにいそしみながら、ほそぼそと研究を続けてきた人がいる。

最近の若い人はかなり違うが、若い研究者夫婦から、別れたという挨拶状が来た。仲が悪かったようには見えなかった。

平成7年度事業計画

1. 第18回役員会(6月10日)
2. 「鴻文会会報第15号」発行
3. 山口支部結成準備
4. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会
5. その他

平成7年度予算

収入の部

科目	7年度予算額	6年度予算額	比較増減	摘要
繰越金	424,437 円	1,146,709 円	△722,272 円	
会費収入	1,100,000	1,200,000	△100,000	5,000円×220人分 平成7年度入学者214人
名簿収入	180,000	180,000	0	1,500円×120部
雑収入	50,000	10,000	40,000	預金利子
合計	1,754,437	2,536,709	△782,272	

支出の部

科目	7年度予算額	6年度予算額	比較増減	摘要
会議費	100,000 円	100,000 円	0 円	役員会、その他
印刷費	220,000	220,000	0	会報印刷費(4,000部)
郵送費	300,000	300,000	0	葉書購入、会報郵送料、 通信連絡費
事務費	360,000	360,000	0	会報発送などアルバイト謝金(12万円) 幹事謝金、事務手伝い謝金(15万円) 消耗品費(3万円)
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
積立費	0	1,000,000	△1,000,000	
予備費	674,437	456,709	217,728	
合計	1,754,437	2,536,709	△782,272	

特別会計

科目	7年度予算額	6年度予算額	比較増減	摘要
積立金	5,155,401 円	4,103,540 円	1,051,861 円	中期国債ファンド、定額預金
積立金・新規	0	1,000,000	△1,000,000	
利子収入	50,000	15,000	35,000	
合計	5,205,401	5,118,540	86,861	

男性に顔を合わせた機会に、事情を聞いてみると、二人とも職業を持って、多忙になり、共同生活が無理になったので、別々に暮らすことになりましたと、さばさばした顔で答えた。別の女性研究者は、自分の独立を守るためといって、子供が二人あるのに、夫婦の共同戸籍を作らず、子供を自分の戸籍に入れている。それで何にも困ることはないそうである。試みに、夫君が地方へ単身赴任して、両方が忙しくなり、別居を維持できなくなったら、どうするかと聞いて見たら、まず家政婦を雇う。経済的理由で雇えなければ、彼をやめさせる。男はいくらでもかけがえがあるが、女の大学教員は数が少なくて貴重だというのが理由だそうである。それで彼がうんといわなければ断然別れるのだそうである。

もっとも、研究の分野には近頃女性の進出が著しい。山大人文学部にも、今では七人の侍ならぬ、七人の女性教員がいる。研究教育の分野で大いに活躍している。私の専門の中国文学であるが、東大の中文の主任教授は女性である。しかもそれが何の話題にもならない。男性の牙城と目された大学を女性に開くために、先輩女性が悪戦苦闘してこられた成果が実りかけていると言えよう。あるフェミニズムが問題になった席で、こう言い放った女性がいた。「家父長制的男性の書く論文と、フェミニズムの男性の書く論文とは、水準の高低はともかく、質的にちがう。」と付け加えた。ドーカツの意味をめぐって議論が沸騰したが、どうやらこれからは女性に評価されない論文を書い



経済学部商品館の向こうに人文学部

たのでは、大学にポストが得られなくなるといふ、おどかしらしかつた。
おどかしが、おどかしですまなくなり、うな、大学をめぐる現実がある。山大的な人文学部とくに言語文化学科では、とつくの昔に、女子学生が過半数を越え、いわゆる女子大化が顕著になっている。これは山大的の特殊現象ではなく、人文系の学部では全国的に普遍的に見られる。自然科学や社会科学が人文科学よりもよる女性に適していないといえないと思うが、なぜか世間の評価はそうなっているらしく、高校の受験指導でも女子は人文系となつていふし、法学部や工学部志望にいい顔をしない親も、文学部とかならというらしい。その結果どうなるか。教務委員として教育実習校の挨拶まわりをしたとき、某県の高校長から、英語や国語の教員志望者は女子ばかりで、教員がアンバランスで困る。もっと男子を志望

させてほしいと要望があった。私はそれはブーメランで、もともと人文学部の国文や英文には女子しか来ていないのです。高校から入ると優秀な教員志望の男子を受験させて下さいとお願ひした。同じ様なことが人文系の大学院に起こつていて、どこの大学の院も女性の進出がいつか始まる。それが今、教官人事に反映し始めており、将来はいつそうなるにちがいない。
学問に本来、男女の区別はない。優秀な女性がどんな研究の分野に入つてくるのは時代の趨勢でもあるし、学問のためにも歓迎すべきである。女性にポストを奪われるのを好まなければ、男性たるもの、いっそう学問に精進して、よりよい業績をあげるしかあるまい。ひいては学問の活性化、学園の活性化にもつながることである。
(国際コミュニケーション・教授)

平成六年度
人文学部卒業生・
大学院修了生進路状況
人文学科

- 建設業
山口セキスイハイム、ゼニヤ、セキスイハイム山陽、モール工業、積水ハウス、扶桑建設工業、館林
製造業
タカラスタンダード、ファーストリテイリング、丸三、談、大村印刷、福博総

入学年度別学生数

学 科 (専攻)	性別	7	6	5	4	3	2	元	63	計
		学	男	63	50	45	3	1		
人文社会科学科	女	50	60	61						171
	計	113	110	106	3	1				333
言語文化学科	男	23	36	22		1				82
	女	78	69	79	1					227
人文学科	計	101	105	101	1	1				309
	男				29	16	6	3		54
語学文学科	女				77	5	1		1	84
	計				106	21	7	3	1	138
合 計	男				18	3	5	1		27
	女				89	4	1	1		95
部	計				107	7	6	2		122
	男	86	86	67	50	21	11	4		325
大 学 院	女	128	129	140	167	9	2	1	1	577
	計	214	215	207	217	30	13	5	1	902
地域文化専攻	男	3	5	2	1	-	-	-	-	11
	女	6	2	1		-	-	-	-	9
言語文化専攻	計	9	7	3	1	-	-	-	-	20
	男	2	3			-	-	-	-	5
合 計	女	1	3			-	-	-	-	4
	計	3	6			-	-	-	-	9
部	男	5	8	2	1	-	-	-	-	16
	女	7	5	1		-	-	-	-	13
大 学 院	計	12	13	3	1	-	-	-	-	29

- 合印刷、日立製作所
卸・小売業
ブルート、セイナス、住友林業、太陽家具、東急ハンズ、松早グループ、はせがわ、ダイエーコンビニエンスシステムズ
金融・保険業
東京海上火災保険、広島総合銀行、山口銀行、三洋信販
証券・不動産業
東京メディッククス、東武信販、ピアレックス
運輸・通信業
関光汽船、NTT・DOCOMO九州
教 員
福岡工業大学、長崎ウエスレアン短大、鹿児島県教員
新聞・テレビ・出版業
読売新聞社、みなと山口合同新聞社、中央出版、宮崎日日新聞、日本放送協会(NHK)
会(NHK)
広告・観光・サービス業
ロイヤル、チガミ(地上税理士事務所)、小郡町社会福祉協議会、サントリイパブリシティサービス、自強学館、掛川市農協、ハウスステンボス、ヤマハオートセンター、CS赤れんが、ユニバーサルエンタープライズ
国家公務員
中国郵政局、鹿児島県池之上郵便局、高木郵便局(津久見)、郵便局(岩国、名古屋)、航空自衛隊(奈良)
地方公務員
北九州市役所、明石市役所、熊本県教

語学文学科

育庁、大分県警察本部、島根県警察学校、鹿児島県教育庁、防府市役所、大阪府警、山口県立美術館

建設業

穴吹工務店

製造業

伊藤園、新川電気、カプコン、九州テナ、スズキ

卸・小売業

大阪三貴、岩久、ブルート、ユーノス山口、九州ジャスコ、ジャスコ(千葉)

金融・保険業

住友生命保険、宇部信用金庫

運輸・通信業

NTT(津山支店)

教員

山口県教員、長崎県教員、福岡県教員、九州女子高校、野田学園、にぶ小学校、西南女学院中学校、宮崎県立延岡東高校、兵庫県立明石北高校、岡山県立児島高校、防府養護学校高等部、佐賀県立鹿島高校、佐賀県立白石高校、福岡県立門司商業、山口大学附属図書館(司書)、山口東京理科大(司書)

新聞・テレビ・出版業

日本出版、おはよう朝日、みなと山口合同新聞社、OBS大分放送、南海放送、西部読連

広告・観光・サービス業

チガミ(地上税理士事務所)、簡易保険福祉事業団、後藤塾、ロイヤル、アサシテ、広島県農業協同組合中央会、佐鳴学院、西倫義塾、トライグループ

国家公務員

労働省山口県職業安定課、自衛隊(久留米)

地方公務員

徳山市役所、高梁市役所、田川市役所、山口県商工労働部職業安定課、山口県立美術館、山口県庁、大分県職員

大学院人文科学研究科

地域文化専攻

古賀大盾記念館、太宰府文化財調査事務所、山口女子大学助手

言語文化専攻

広島大学大学院教育学研究科(博士)、山口県中学校(臨探)、立教大学大学院聴講生、九州大学大学院比較社会文化研究科(修士)、三喜ゴム(株)

山口大学 人文学部

公開講演・講座

第八回公開講演

テーマ 美術と公共性
とき 平成七年九月二十三日(土)
一三時三十分~十六時

ところ 宇部市シルバーふれあいセンター
演題 「美術にとって『公衆』とは?」
講師 人文学部 助教 外山紀久子

演題 「山口と現代芸術」

講師 人文学部 教授 奥津 聖

平成七年度

山口大学人文学部公開講座

テーマ 「中国の言葉と文化」

期間 平成七年十月二十一日~十一月二十五日の毎週土曜日 六回シリーズ(毎回午後一時三十分~三時)

ところ 山口大学人文学部

日程・内容・担当講師
10月21日(第一回)
10月28日(第二回)
11月4日(第三回)
11月11日(第四回)
11月18日(第五回)
11月25日(第六回)

「漢字とその発音をめぐって」
「研究史の一端に触れる」
「自然と文化」

富平 美波 助教
阿部 泰記 教授

入谷 仙介 教授

* 編集後記 *

★九五年もまた暮れようとしています。このごろ月日の流れが早く感じられます。平成も八年を迎えます。昭和が終わってはや八年。大正を改元した昭和の場合は同じ八年はどんな年だったのでしょうか。はじめて元年なるものを経験した私にとっ

て、元年から八年までは意外と短かく感ぜられます。日中戦争へと突き進む流れ。重く時間が停止しているように夢想していた昭和の侵略戦争。観念の上でとらえていた昭和の時間の流れを、いま同じ物差しで実感しています。とは言え、その感覚も主観的なものにすぎませんが、★鴻文会の同窓会事務所、正式には「鴻文会連絡事務所」ですが、このほど大学前の沖田ビル二階に開設いたしました。すでに同窓会に関わる集まりに盛んに利用されています。理学部の関係者の方によくお会いします。理学部同窓会と共同で一室を借りたものです。鴻文会を作った理学科の方と疎遠になり寂しいという声も聞いておりましたが、思いがけなく交流が復活しました。出費の軽減が目的でしたが結果オーライです。会長のご挨拶にもある通り、八月三十日に事務所開設祝いの集まりをいたしました。待望久しかった同窓会事務室に全員集合でした。小さいながらも念願の「我が家」といったおもむきで感慨ひとしおのものがありました。教官会議の場でも学部長から披露していただきました。「ホーツ」という感嘆の声、「よかったね」と聞こえた。両同窓会の会長はじめご尽力くださった方々すべてに感謝申し上げます。平日の午後は事務担当者が勤務して対応いたします。いろんな連絡の場として大いに活用ください。そして、一度は事務室をのぞいてみてください。併せてお願いがあります。転居先が不明になっている友人、先輩、後輩の住所を御存じの方、どうかこの際、右連絡事務所あて電話なり、FAXなりでお知らせください。★鴻文会会報も号を重ねて一五号発行となりました。ただ、少々心配なのは、編集を担当している学内幹事全員の年齢が近々五十歳を越えることです。後続あるを信じたいと思います。

祝! '96年4月開校 日本ジャーナリストデザイン専門学院



To the Members
for your motto "Journalists"

学校法人 日本ジャーナリストデザイン専門学院創立記念式典
[95年5月25日、東京プリンスホテル]にてマーガレット・H・サッチャー
イギリス元首相と会談する山崎種三本校会長

出版編集 取材 マーケティング 広告デザイン 脚本

京都科学技術学園会長 **山崎 種三**
(昭和35年 山口大学文学部 哲学科卒業)

ジャーナリスト系

マスコミ総合専攻科/マルチメディア専攻科
広報・編集専攻科/文芸・創作専攻科
国際ジャーナリスト専攻科/映像ジャーナリスト専攻科

デザイン系

トータルデザインマーケティング専攻科
セールスプロモーション&イベント専攻科
ファッション&雑貨トータルマネジメント専攻科
フラワーアレンジメント&デザイン専攻科

環境デザイン系

住居空間デザイン専攻科/生活環境デザイン専攻科

工業デザイン系

生活雑貨デザイン専攻科/服飾雑貨デザイン専攻科
グラフィックデザイン専攻科/キャラクターデザイン専攻科

管理職
募集中



本部 〒600 京都市下京区堀川通り堀小路下ル
本校 〒600 京都市下京区西大路八条上ル東側
入試に関するお問い合わせは **TEL.075-321-0300**
※夜 日本ジャーナリストデザイン専門学院

姉妹校

- | | | | | |
|------------|-------------|-------------------|------------|--------------|
| 国際科学技術専門学校 | 札幌科学技術専門学校 | 専門学校PANビジネススクール | 岩手科学技術専門学校 | 東京科学芸術専門学校 |
| 金沢科学技術専門学校 | 京都科学技術専門学校 | 日本ジャーナリストデザイン専門学院 | 京都自動車専門学校 | 大阪産業ビジネス専門学校 |
| 日本海洋科学専門学校 | 大阪総合工学院専門学校 | 兵庫科学技術専門学校 | 岡山科学技術専門学校 | 酒田短期大学 |
| 叡明館高等学校 | 105芸能学園 | | | 以上17校 |